

■秋山玉山 儒学者、漢詩人。文人としての自由な活動と藩儒としての拘束多い生活を調和させた稀有な存在。

あきやまぎよくざん  
赤穂浪士討入1702＝

肥後領だった豊後国鶴崎で、熊本藩の作事方棟梁中山定勝の次男に生まれる。母は篠田氏。名は定政。

幼くして、医をもって聞こえた叔父秋山需庵の養子になり、学業を好んで才能を発揮、

徳川綱吉没・1709＝ 7歳：

冥途の飛脚・1711＝ 9歳：

徳川吉宗將軍1716＝14歳：

長じて、医学修業のため熊本に出るが、**養母が水足屏山の妹だったことから、浅見綱斎の門下ながら荻生徂徠を崇敬する屏山について儒学を学ぶとともに、5つ下の屏山の子博泉と良きライバルとなる。**

・・・・・・1719＝17歳：養父秋山需庵が熊本藩の御医師になる。朝鮮使節が来日した際、屏山が博泉を連れて大坂で詩文を唱酬したのに同行できなかったばかりでなく、博泉が一躍文名を挙げたことを知って悔しがる。

洋書輸入解禁1720＝18歳：

小石川薬園・1721＝19歳：

火の見櫓制・1723＝21歳：

近松没・・・・1724＝22歳：

この年、博泉が荻生徂徠から“水神童”と絶賛される。  
屏山の推挙で、**\*好学の藩主細川宣紀から儒員に抜擢され、中小姓に召しだされるという異例の出世。**  
さらに、藩の文学の推挽で、藩主の参勤交代の一行に加えられ、林家4代榴岡に入門。すぐに頭角を現す一方、秘本を読んだり、遊蕩体験も積み、「論語」や「荘子」をパロディにした狂詩の傑作「春宵観秘戯図引」をもつ一方、細井広沢の知遇を得、郷土の先輩北島雪山についての教授を受けて、鑑識眼を磨くとともに、広沢の印をその嗣子が集成した「奇勝堂印譜」の序も書いている。

徂徠没・・・・1728＝26歳：

梅岩心学始・1729＝27歳：

この年、博泉は「太平策」を著すなど早熟ぶりを示し、容易に人は認めなかったが、玉山の詩才には敬服。將軍吉宗に広南から象が献上され、林榴岡に従って門人一同で見物した際、「広南献象」を詠む。

・・・・・・1731＝29歳：

享保大飢饉・1732＝30歳：

養父秋山需庵が病没し、急ぎ帰郷。再び出府するも、**\*藩主細川宣紀が死去。帰藩を命じられ、藩儒に取り立てられる。かつての師水足屏山が妻の姦通の相手を斬殺しようとして逆に斬殺され、子博泉も負傷する事件が勃発、さらに家禄を除かれた浪人博泉がまもなく憤死する事態から、生き方について多くのことを学びとる。のち博泉を偲んだ詩「詠水斯立遺草有感」。**

・・・・・・1733＝31歳：

・・・・・・1734＝32歳：

前年から江戸藩邸で世子の教育に当たり始めた辛島淳美が死去、後事を託され遺児義助を扶持教育。

真面目に服して来た3年間の養父の喪が明ける。

・・・・・・1738＝36歳：

・・・・・・1740＝38歳：

東明禅師の「琴浦小集」の序を書き、**模倣を排除し、精神を集中させてインスピレーションを得るべきという自らの詩論を吐露。のちに方法そのものを詩「雑言」に詠み、その秘法により、次々傑作を生んで行く。**

・・・・・・1741＝39歳：

公事方御定書1742＝40歳：

梅岩没・・・・1744＝42歳：

前年来病床にあって衰弱するも、弟子の就職の斡旋をするなど、律儀ぶりもしっかり。  
**以降、藩主細川宗孝が江戸に参勤する都度、随行することになる。**  
親交するも、議論好きに閉口させられ、対照的な生き方の朱子学者藪慎庵が死去。

義経千本桜・1747＝45歳：

忠臣蔵・・・・1748＝46歳：

・・・・・・1749＝47歳：

・・・・・・1750＝48歳：

**藩主宗孝が江戸城中でノイローゼになっていた板倉勝該の狂刃に倒れる。後を継いだ細川重賢は、すでに世子の時から相談相手をしており、重賢の名まで選上、藩主重賢初のお国入りに随行、以後、参勤の都度随行して、毎夜のように侍読を務めるなど、有数の好学の藩主に寵愛され、珍しいほどの自由を与えられるも、節度は守る生き方で、**  
辛島義助を江戸に連れて教育を受けさせ、のち、藩邸で講釈するようになると衣裳貸与までしている。  
前年の参勤でそのまま江戸に滞在する間、盲目の詩人高野蘭亭と前後して、**服部南郭と知り合い、以後親交して、詩文を学んで行く。**

徳川吉宗没・1751＝49歳：

・・・・・・1752＝50歳：

参勤に備え、藩主重賢愛好の「春秋左氏伝」の語句を抄録。青年時に参禅した面山和尚に書牘。  
個性の独立を求め、退官隠逸に憧れる詩を詠むようになるが、その時のために、現実には深入りしない慎重さをも持つ。座班物頭格となると、**“一生の3つの志願”の一つ藩学建設の義を建白し、その取り調べを命じられ、計画的かつ入念な調査、**

薩摩藩工事・1753＝51歳：

山脇東洋解剖1754＝52歳：

自然真営道・1755＝53歳：

・・・・・・1756＝54歳：

源内物産会・1757＝55歳：

早くも、作業奉行らに学寮創設の命が下され、  
水足益至の死去を悼んで「祭習字軒先生文」。**\*藩主重賢の音頭で、服部南郭の序を得て「玉山集」が刊行され、“一生の3つの志願”の一つ目が実現。**  
**自ら命名した藩校{時習館}の開校で、2つ目も実現。教授を務め、蔵書にも尽力。この年の参勤の途次、藩主重賢の配慮で、“一生の3つの志願”の最後で少年時から夢だった富士登山、傑作「望芙蓉峰」を詠む。**  
小堀流水練創始者長順の「踏水訣」に序を書く。「**富嶽記**」を刊行。服部南郭から手放しの賛辞を受ける。  
高野蘭亭の死去に、「哭高子式山人」。この年の参勤には長男も同道。**おそらく藩主細川重賢の作詩の手引書として刊行された「韻選」の序で、自らの韻についての考え方を述べている。**

宝暦事件・・・・1758＝56歳：

大式政治批判1759＝57歳：

大岡忠光没・1760＝58歳：

・・・・・・1761＝59歳：

・・・・・・1763＝61歳：

評判悪しき片山兼山が頼ってきて入門。もめ事あるも処理し、最後まで面倒を見る。  
**服部南郭が死去。**  
水泳を奨励する藩主細川重賢が隅田川で小堀長順の泳ぎを賓客に見せた際、同席。身体衰弱するなか、  
参勤の途次、平宗盛の寵姫遊夜の墓を見て、**南郭との出会いを記念する傑作「遊夜詞」を詠む。**  
水足益至の未亡人の死去を悼んで「哭千葉氏詩並序」。**\*{時習館}内に新設の講堂での授業に出席する藩主重賢を案内、初めて参勤随行を免除され、藩主重賢が江戸に滞在中、没した。**  
画家的センスもあり、親交する米田松洞に肖像画を描かせたりし、書は、肥後の三名筆とされる。